

【旧約聖書日課】マラキ書 3章19～24節

19 見よ、その日が来る

炉のように燃える日が。

高慢な者、悪を行う者は

すべてわらのようになる。

到来するその日は、と万軍の主は言われる。

彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。

20 しかし、わが名を恐れ敬うあなたたちには

義の太陽が昇る。

その翼にはいやす力がある。

あなたたちは牛舎の子牛のように

躍り出て跳び回る。

21 わたしが備えているその日に

あなたたちは神に逆らう者を踏みつける。

彼らは足の下で灰になる、と万軍の主は言われる。

22 わが僕モーセの教えを思い起こせ。

わたしは彼に、全イスラエルのため

ホレブで掟と定めを命じておいた。

23 見よ、わたしは

大いなる恐るべき主の日が来る前に

預言者エリヤをあなたたちに遣わす。

24 彼は父の心を子に

子の心を父に向けさせる。

わたしが来て、破滅をもって

この地を撃つことがないように。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 4章1～5節

1こういうわけですから、人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです。2この場合、管理者に要求されるのは忠実であることです。3わたしにとっては、あなたがたから裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、少しも問題ではありません。わたしは、自分で自分を裁くことすらしません。4自分には何もやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです。5ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 1章19～28節

<sup>19</sup>さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、<sup>20</sup>彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。<sup>21</sup>彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。<sup>22</sup>そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」<sup>23</sup>ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。

『主の道をまっすぐにせよ』と。」

<sup>24</sup>遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。<sup>25</sup>彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うと、<sup>26</sup>ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。<sup>27</sup>その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」

<sup>28</sup>これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。

### 主の道をまっすぐに！【こども説教のために】

アドヴェントの第三のロウソクは、「喜び」を表すバラ色です。ご降誕の祝いの日を前にして、わたしたちは、すでに喜びを隠せません。その日が喜び祝われる日であることを、知っているからです。

御子のお生まれを、誰よりも先に喜び祝った人がいました。「洗礼者」と呼ばれるようになるヨハネです。ヨハネが母エリサベトの胎に宿って六カ月後に、御子イエスは母マリアの胎に宿りました。二人がまだそれぞれの母の胎にいたとき、マリアがエリサベトを訪ねると、エリサベトの胎の子ヨハネは踊り喜んだのです（ルカ 1:39~45）。ヨハネには、マリアの胎の子のことが分かったのでしょうか。

ヨハネは、預言者の言葉を用いて、「**主の道をまっすぐにせよ**」と言います。おいでくださる方をお迎えするための道をまっすぐにしましょう、と。道が曲がりくねっていたのでは、途中で迷ってしまうかもしれません。おいでくださる方をお迎えできなければ、喜びが遠のいてしまうばかりか、その方との交わりが絶たれてしまうことさえあるでしょう。だから皆、おいでくださる方をお迎えするための道をまっすぐにしましょう、と言うのです。

御子をまっすぐにお迎えしましょう。わたしたちのまっすぐな道を見て、人は、御子をまっすぐにお迎えするようになるでしょう。

## 父の心を子に、子の心を父に

教会が伝統的に「待降節」の導き手としてきたのは、旧約の預言者たち、そして洗礼者ヨハネです。

洗礼者ヨハネは、その名の通り「洗礼運動」によって主イエスに先駆けてユダヤ人社会で知られていた宗教家です。主イエスに洗礼を授けたのも、このヨハネでした。初代教会は、主イエスと洗礼者ヨハネとの関係は、そのご降誕のときにまで遡るものだとして、主イエスの降誕物語と一つに結びつけた洗礼者ヨハネの降誕物語を伝えています（ルカ 1 章）。「降誕祭」を祝うようになった教会もまた、その備えの期節を歩むときに、まず洗礼者ヨハネが指し示す主イエスを見るようにと、導かれてきました。

旧約聖書日課（マラキ書）は、「旧約聖書」の終わりに、「**主の日が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす**」という神の御言葉を預言として告げています。使徒たちの教会は、洗礼者ヨハネこそ、この遣わされることになっていた「預言者エリヤ」だと理解していました（マタイ 17:11~13）。洗礼者ヨハネは、「エリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせ、準備のできた民を主のために用意する」（ルカ 1:17）者だったと教えました。預言者が「**彼は父の心を子に、子の心を父に向けさせる**」と言っている「エリヤ」とは、洗礼者ヨハネに他ならないと考えたのです。

この「エリヤ」であるところの洗礼者ヨハネに導かれて「降誕祭」に備えるわたしたちは、父と子、親子が互いに心に向け合う仲睦まじい家族としてクリスマスを迎えたいと願うかもしれません。確かに、降誕祭は、家族が集まるときとして大切にされてきました。日本で受け入れられてきたクリスマスも、かつては子どものための祭りと言われ、その後は恋人たちのための記念日と喧伝された時代もありましたが、近年は家族の集まるイベントと考えられるようになってきました。

それは、決して悪いことではないように思えます。けれども、教会は、預言者の預言から、別のことを聞いてきたのです。それは、御父の心が御子に向けられ、御子の心が御父に向けられる、という、主のご降誕の物語の中で知らされる事柄です。

マリアを母、ヨセフを父として生まれた方を、使徒たちは、「御父（神）の御子」として迎えました。主イエスは「御父の御子」としてわたしたちの間にお生まれになられる、と教えたのです。それはわたしたちも「御父の子」となるためだと、教えたのです。

「降誕祭」に御子をお迎えするとき、わたしたちは、「御子の御父」を「わたしたちの御父」としても知るようにと、導かれています。

## あなたがたの知らない方が…

「待降節」を共に歩んだ先で、今年も「降誕祭」の祝いを迎えます。みなさんが、それぞれの家族と共に「降誕祭」の喜びを分かち合うことができるようにと、願わずにはられません。けれども、たとえそれが叶わずとも、わたしたちは、喜びを分かち合う家族が無いわけではありません。「神の家族」に加えられているのです。

「降誕祭」を迎える者の真の願いは、親兄弟、子や孫ら「自分の家族」が皆、その家族の中に引き籠って小さな幸せを守ろうと必死になることではないはずです。彼らが皆、「御父の子」として新しく生まれ、たとえ「自分の家族」を失ったとしてもなお、大きな「神の家族」の中に生かされている者であることを知るようになること。それこそが、わたしたちの真の願いではないでしょうか。それこそが、洗礼者ヨハネによって導かれていることなのではないでしょうか。

人は、一人孤独に生きることのできる者ではありません。小さな核家族に閉じこもって生きられる者でもありません。互いの顔を知り、名を知り、挨拶を交し合うことのできる者たちの交わりの中で生きる者として、人は造られてきたのです。それが失われているとしたら、人をお造りくださったお方が、黙って置かれるはずがありません。神ご自身が「御父」となって、わたしたちすべての者を「神の家族」の交わりの中に生きることができるようにしてくださるのです。その初穂として、御父は「御子」をわたしたちの間に生まれさせてくださったのです。

この「神の家族」に新しく加わることを願って、洗礼を志願して下さっている方がいます。万事が整えば、来る「降誕祭」の祝いの礼拝の中で、洗礼式を執行することになるでしょう。

「誰のことだろうか」と思われるかもしれません。すでに長く礼拝に加わって下さっているあの方だろうか。それとも、別の方だろうか。どんな人だろうか、知らない人だろうか、と。皆さんには、たとえ誰のことであろうと、「神の家族」の中で新しい赤子が誕生しようとしていることに、共に備えていただきたいのです。

洗礼者ヨハネは、「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」と告げています。主イエスのことさえ、人々は「知らない人」だったのです。新しく生まれてくる子は、常に、わたしたちにとってまだ「知らない人」に他なりません。お互いに「知らない人」から始まるのです。相手が大人であれば、そこから始まる関係は難しいと思うかもしれません。けれども、わたしたちは、「幼子」を迎えようとしています。「幼子イエス」を迎えようとしています。それは、わたしたちの「まだ知らない人」なのです。